

木登りライオン

アニマルフォトグラファー
トラベルライター

平 岩 雅 代

ライオンはアフリカに暮らす大型のネコ科の動物です。アフリカにはネコ科の仲間としてライオンをはじめヒョウ、チーター、カラカル、サーバル、ワイルドキャットなどがいますが、オスが持つ立派なたてがみ、“プライド”と呼ばれるオスを中心に複数のメス、子どもたちで構成される群れなど、他の動物をしのぐ存在感、威圧感があります。

ところでアフリカ大陸の赤道直下、タンザニアのマニヤラ湖国立公園に住むライオンは、何故か昔から特別変わった習性をすることで知られています。それは“木登り”という特技です。

マニヤラ湖の木登りライオンといいますと、高名な動物文学者である戸川幸夫先生が書かれた一文を、まっ先に思い起こします。

戸川先生はアフリカへもたびたび出かけられ、写真や絵画でも動物の姿を多く記録されていていらっしゃいます。

8年振り、何度目かのケニア訪問の際戸川先生はマニヤラ湖以外で“木登りライオン”に出会われたそうです。そのくだりをご紹介しますと、

ただ嬉しかったのはタンザニアのマニヤ

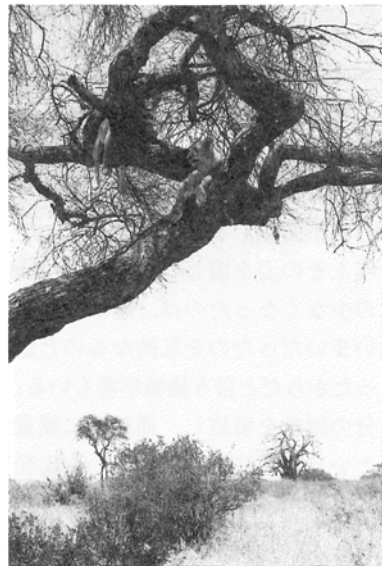


写真1 太いアカシアの木に登ったライオン母子
ラ NP(注……ナショナル・パーク, 国立公園のこと)でしか見られないかと思われていた「木登りライオン」にマサイマラで会えたことだった。高いアカシアのてっぺんに一匹の成長した雌ライオンが登り悠々と昼寝していた。これはこの地方では従来見られなかったものである。われわれを案内した4人のベテラン運転手も初めて目撃したと語り、これは極めて珍しい事だと目を見張っていた。彼らが初めてだというのだから恐らく観光客でこの光景を見た人は少ないだ



写真2 立ち上がる母と寛ぐポーズの子

ろう。だが私はこれがライオンの間の伝承によるものなのか、それともこのライオンだけの偶発的な発見によるものか判断がつかなかった。そこで後でレンジャーを訪ねてみた。彼の答えは、

「極めて異例のことだがそれは伝承によるものと思えます。マニヤラの森林に棲息するライオンが森林性というところから、豹のように木に登ることを覚えた。木に登れば涼しいし、害虫にたかられることも少ない。そんなことでこの風習はそこに棲息するライオン全部に広がった。この風習は、時間はかかったが、マニヤラからセレンゲティ NP のライオンへと伝承され、それが隣接するこのマサイマラへと伝わり始めているのです」というものだった。

彼の説明が正しいとすれば“動物と伝承”の面白い実例になると思った。私はセレンゲティのライオンが果たしてこの習慣を身

につけているかどうかを確かめたいと思ったが、今回は日数もなくその機会は得られなかった。セレンゲティに行かれる方があったらぜひそれを確かめて貰いたいと願う。実は私もマニヤラ湖ではたびたび木登りライオンに出会っていますが、正直なところどうしてこのライオンが木に登るのか、よくわかりませんでした。

ところが一昨年の夏、タンザニアのタランギーレ国立公園で若いオスライオン2頭が、樹上で昼寝をしているところに出会い、さらに昨年の夏にも同じタランギーレ国立公園で、母親と成長した子ライオンの2頭が、木の上で休んでいるところに遭遇し、思う存分撮影を堪能することができました。

時は昼下がり、木陰のライオン母子は、あちらを向いたかと思えば、立ち上がって体の向きを変えたり、いろいろなポーズを、まるでショーのように見せてくれました。

時の過ぎるのも忘れ、気が付いた時には10数本のフィルムをその場で使っていました。

私はこれまでにアフリカの草原でたくさんのライオンに出会ってきましたが、このタランギーレの木登りライオン母子との出会いは、今までにはない忘れられないものとして、私の心の中に残っています。

〈ライオンひとくちメモ〉

▶ライオンのスワヒリ語名は“シンバ”。アメリカのディズニープロダクションが製作し、目下ブロードウェイ、ロンドン、東京で大ヒット上演中のミュージカル『ライオン・キング』の主

人公である仔ライオンの名前はこのスワヒリ語に由来する。

▶ライオンの狩りは1週間に1～2回。群れの中のメスや若いオスが協力して獲物を捕らえる。